神道と過疎化に関する研究史

――広義としての社会変動の枠組みから――

冬月　律

目　次

はじめに
一、先行研究レビューの方法
二、第Ⅰ期―昭和二十年代から昭和四十年代後半まで―
三、第Ⅱ期―昭和五十年代から現在に至るまで―
おわりに

はじめに

近年、人口減少社会に突入した日本社会において、もっとも注目される社会問題の一つに過疎化が挙げられる。本論はそのような社会構造の変動によって生じた過疎化と神社神道の関係について把握することを目的としている。具体的には、戦後から現在に至るまでに研究者たちによって蓄積されてきた神道研究のうち、とりわけ社会変動との関係が論じられているものを取り上げ、それらの特徴や課題を整理していく。

本論を進める上で、以下のような観点を押さえておきたい。まず過疎化は工業化、都市化などのような社会構造の変動による現象として、広義の社会変動に含まれる点である。先行研究に当たる際に、過疎化と宗教といったテーマに限定すると、なかなか神社神道までには辿り着けないことが多く、この分野での先行研究はほとんどないと述べる論者も少なくない。かつては筆者もそのように考えていた。しかし、近年のマス・メディアなどで少子高齢化、人口減少という用語が頻繁に出現するにつれ、学問領域において過疎がより注目されるようになり、今一度先行研究について探求する必要性を感じた。[1] こうして、改

めて先行研究を探るためには、まず社会変動と神道研究の動向を把握しつつ、関連研究の中から過疎化との関係性を浮き彫りにする必要があると考える。次に、「過疎化」は、社会構造の変動によって引き起こされた様々な問題のうち、とりわけ人口流動に起因するところが大きい。地方から都市に人口が集中することで、地方では過疎化、都市では過密化が起こる。その理由から、「過疎化」を扱う際にはそれと表裏一体の関係にある「過密化」を切り離して考えることはできない。実際の人口変動を扱う研究でも、過疎を論じる際に過密が言及されることが多く、後述する先行研究の中にもそうした研究が含まれている。最後に、過疎地域内の地域性（差）である。過疎地域といっても農山村や漁村などに見られる伝統的村落型社会と商業施設や役場などが密集する都市型社会を一概に同じ過疎地域として論じることはできない。[2]

要するに、過疎化と神社神道との関係については、まずは社会変動といった大きな枠組みの中で捉え、次に関連する個々の研究がどのような観点に視座を置いているのか、などに焦点を絞って、過疎化と神社神道双方の関係性に注目しながら把握することが必要であろう。

以上のことを踏まえ、以降は論旨の展開上、便宜的に設けた時代区分に沿って、神社神道に関する先行研究を概観していく。このような戦後から現在に至るまでの神道研究の基本的動向を把握することで、過疎化と神社神道に関する本論の位置づけも明確に提示できると考える。

一、先行研究レビューの方法

本論に入る前に、試みとして単純に「過疎」をテーマに取り組んだ研究がどれくらいあるのかを調べてみた。まず、論文検索でよく知られているＮＩＩ論文情報ナビゲータ（通称 CiNii）を利用して「過疎」をキーワードとして検索した結果、過疎がテーマに入っているものは約四九五一件（平成二十八年三月二十九日現在）ヒットした。それらの検索結果には記事や論文が混在しており、全体の詳細を把握することは困難であるが、最初に過疎関連の研究がヒットしたのは昭和三十年であり、本格的にヒット数が多かったのは昭和四十年代以降であったことが確認できた。今度は国立国会図書館所蔵『レファレンス文献要目』第十五集〔過疎問題に関する文献目録〕（昭和四十九年）をみてみると、昭和四十一年一月から四十八年三月までの間に一三七四本（同名やシリーズを除く）にも及ぶ研究が過疎問題を扱っていた。[3]文献目録にはそれぞれの研究成果を①人口・労働、②産業・交通、③社会・生活、④地域、⑤行政財・対策、⑥その他、に分類して整理されている。それ以降、同様の文献要目が刊行されることはなかったが、過疎問題に関する研究は現在

も継続して行われている。[4]これらの結果は、「過疎」という用語が世間で知られるようになった昭和四十一年を皮切りに広い分野で過疎に関連する研究が次々と発表されていくことと符合している点が興味深い。

以上を踏まえ、本節では過疎化を広義の社会変動の一つの部分として捉え、神社神道との関わりをみていくことにしたい。

なお、先に述べたように、論を展開する上で、以下の研究史については便宜的にⅠ期とⅡ期に分けて叙述する。第Ⅰ期は、過疎問題に関する研究が盛んに行われた時期に当たる。その中で過疎化と神社神道に関する研究は、戦後の社会変動と神道との関係をテーマにしたものが主流であった。そこには戦後の諸政策の結果としての社会変動が神道研究にも影響を及ぼしていることがうかがえる。検討する内容としては、先述の『レファレンス文献要目』（昭和四十九年）をはじめとする、『日本文化研究所紀要』（昭和三十二年～平成二十年）[5]、『宗教研究』（大正五年～）[6]、『神道宗教』（昭和二十三年～）などに所収・掲載されている神道関連研究とする。当該期の研究史については、すでに宗教社会学者の石井研士が著書『戦後の社会変動と神社神道』（大明堂、平成十年）[7]の第一章「戦後の神道研究をめぐる諸問題」と第二章「神道と社会変動をめぐる研究史」[8]で論じている。[9]本節では石井の指摘を踏まえ、筆者による分析を付け加える形で全体の動向を概観したい。

次いで、第Ⅱ期については、昭和五十年代以降に過疎研究が低調に転じ、神道研究も社会変動と神道に関する研究が第Ⅰ期以降になると一部を除いてほとんど空白の状態になっている。この空白は、石井も指摘するように、社会変動と神道の研究が地域社会の変化と祭祀集団との関係へと、つまり祭りの研究にその中心が移ったこと、また祭りと社会変動の研究も、人類学や社会学からの研究が進んだことを指している。[10]ただ、祭りと社会変動との関係から、この時期はこれまでの神道研究の学問領域を他領域における個別研究にまで広げることで、（部分的に）過疎地域における神社を取り巻く変化を扱うものを拾い上げることは可能であるため、その作業で該当した研究を中心に概観したい。論文の選定には、まずは第Ⅰ期に挙げた雑誌に、『宗教と社会』（平成七年～）、『神社本廳教學研究所紀要』と文末に掲載されている「年間神道関係論文目録」（平成八年～平成二十年）[11]、『神社本廳總合研究所紀要』（平成二十一年～）を加えた上で、比較的に神道研究が掲載されている割合の高い学術雑誌（機関誌）[12]順にこの時期における先行研究の有無を探り、同時に他分野における個別研究にも目を配った。

二、第Ⅰ期―昭和二十年代から昭和四十年代後半まで―

先に述べた石井によると、社会変動と神道に関する調査は昭

和二十年代に先駆的研究が見られるが、本格的に実際の調査が実施され、分析が行われるようになるのは昭和三十年代に入ってからであると述べている。[13] そして、この時期の研究の共通点として、①近代的、近代化、都市化、産業化、合理性など用いる概念は異なっても、近代的な宗教のあり方を抽出して提示しようとする傾向であったこと、②実証性に欠けている、③論文のタイトルや研究対象が真正面から扱ったものではなく、何らかの形で「現在」を意識している、の三点を挙げている。[14] また、石井は『國學院大學日本文化研究所　昭和五十年　創立二〇周年記念概要』における「近代化と神道（都市化及び社会変化を含む）」の領域の成果として一三本の論文[15]を挙げている。とくに、以下の七点については内容の特徴を次のように紹介している。伊藤幹治の「都市化とむらの生活構造序説―忍草の事例分析」（昭和四十年）と同「黒島の社会と宗教の構造と変化―大里事例の予備的分析」（同）、「祭団の構造と論理―沖縄民俗社会論（一）」（昭和五十年）は、生業構造、親族構造、社会関係といった社会構造の変化と、祭祀体系や氏神信仰といった文化レベルでの変化を考察しながら「むら」の都市化現象を明らかにしようとしたもので、花島政三郎の「水没による部落の解体・再編成と宮座―滋賀県神崎郡永源寺町愛知川ダム建設の場合」（昭和四十二年）は、ダム建設に伴う部落祭祀集団の対応・変化に焦点を当てたものであり、戸川安章の「神社綜合調査事例報告―『近代化と神道』の課題にそって」（昭和四十二年）は、近代化・工業化による急速な農村漁村の解体過程に伴って、村落共同体にふかく根をおろしてきた神社の機能の変化過程を捉えることを目的としている。また、森岡清美の「近郊化による神社信仰の変貌」（昭和四十三年）は、人口流入の激しい東京の近郊地である三鷹市野崎と狛江町駒井の二地点における社会構造の変化が地域住民の神道への意識と行為に及ぼす影響を考察し、薗田稔の「祭りと都市社会―「天下祭り」〈神田祭・山王祭〉調査報告（1）」（昭和四十四年）は、詳細な調査から都市祭りを通した地域社会と氏神神社とのかかわりを分析した。[16]

石井によれば、伊藤と戸川の研究は伝統的村落型社会における調査研究である一方で森岡と薗田の研究は都市型社会における調査研究であることを分類した上で、それらの調査が、地域共同体を基盤として成立した氏神神社に都市化・過疎化が及ぼした影響を具体的なケーススタディから明らかにしようとしたものであり、昭和四十年代における貴重な調査報告ということができると述べると同時に、この後一部の調査を除いては、近代化と神道をテーマとした研究への関心がしだいに薄れていくと述べている。[17]

一方で、石井は近代化による神社神道の変化について岸本英夫と平井直房の議論を詳細に論じているが、本研究においても両者の議論は重要な位置を占めている。両者は近代化と都市

化、過疎化による神社神道の変容に高い関心が示されているからである。ただ、岸本の神道研究に関しては「現状の分析をもとにした上での概念化というよりは、西欧世界での文化領域での変動をそのまま当てはめて考えたもの」[18]であるとし、過疎化が神社神道に与えた影響を「民族宗教の内部伝道の崩壊」と表現した平井の一連の社会変動と神社神道をめぐる分析についても「たとえ平井がさまざまな機会に見聞した多くの情報と知見を背景にしているとしても、それはあくまで個人の経験や情報であって、客観化された事実とはいいにくい。」[19]とし、これはこの時期において都市化や過疎化問題を言及した他の研究者にも見出すことができると指摘した。そして、この時期の社会変動と神道に関する研究が、「具体的な神社神道に関する現状分析から、近代化と神社神道に関する分析が試されたというよりは、近代化が前提とされた上で、そうしたプロセスに合致する資料が採用されるといった傾向が存在」[20]し、実証性が欠落していることを指摘している。そして、実証性の高い研究として森岡の「近郊化による神社信仰の変貌」（昭和四十三年）を取り上げるも、森岡の調査と分析はこの時期においては妥当性を有するが、調査地が都市近郊であったことに分析の限界が存在するとした。

ところで、先に述べた伊藤幹治と戸川安章については、人類学または民俗学を専門とする両者の研究における目的や手法が筆者の研究のそれと関係するところが大きく、とくに過疎化と神社神道との関係を探求する本論にとって、それらの研究はもっとも早い段階での先行研究に当たると考える。では、一体、どのような点が過疎化と神社神道と関わっているのかについて、以下で具体的に述べていく。

まず、伊藤の「都市化とむらの生活構造序説―忍草の事例分析」（昭和四十年）は、調査対象地である忍草（山梨県南都留郡忍野村の大字）について、エコロジカルな次元（生業構造）と社会次元における変化過程を述べた上で、むらの宗教生活の変化を論じている。伊藤は調査の結果、対象地域である忍草では社会次元における大きな変化が生じていない、つまり本家―分家の関係を軸にした主要集団による社会の伝統構造に変化がない。他の村落類型と比べて神社は相対的にむらびととの共同体感情を維持する上に、それほど重要な役割を果たしていないと述べて、この時期によく指摘されていた神社の祭の凋落や信仰の衰微という現象が、この忍草の事例では見られなかったことを指摘している。[21]

次に、同じく伊藤の「黒島の社会と宗教の構造と変化―大里事例の予備的分析」（昭和四十年）は、先に見てきた忍草の事例研究と同様、まず対象地域である大里における生業構造と社会関係の構造から、地域社会の祭祀生活の構造と変化について分析を行っている。とくに、社会関係の構造においては、むらの

氏神神社をはじめ大小神社の祭祀体系が、社家衆といわれる祭祀集団を軸とする独自の構造をもって継承されているほかに、年中行事を含む従来の諸慣行についても、それらの構成には凋落・脱落といった変化が生業構造と社会関係の構造の変化と相関関係にあることを指摘するも、それぞれ再構成されながら部分的に維持されていることから、社会全体の構造はなんら変化していないことを述べている。[22]

このように、伊藤の問題関心は社会変動によって祭祀・行事にどのような形態変化があるのかというよりは、むしろ産業構造が大きく変化するなかでも家族形態やむらの伝統的な祭祀構造になんら変化は生じていない点にあることが分かる。[23] つまり、忍草と大里の事例では、それぞれ本家―分家、社家衆を軸とする祭祀体系が形成され、全体的な社会体系の中で独自の位置を占めているほか、神社の祭祀・行事に凋落・脱落現象は見られるが、それは形態変化の段階に留まっていて、構造的な変化は生じていないことが、そういった伊藤の論点を裏付けているのである。

その後も伊藤は社会変動と神道（神社祭祀）に関連する論文を数点発表している。[24] たとえば、「都市化と地域社会の宗教生活」（昭和四十五年）は、社会変動としての都市化と地域社会の宗教生活との関係を考察するものである。伊藤は学問分野における都市化の概念が一様に規定されることがないことから、独自に都市化の枠を「地域社会の都市化」（農村に代表される「むら」の都市化）に限定し、枠づけした都市化の過程を「産業的次元と社会的次元」という二つの次元で捉えることとした。[25] こうした都市化の概念をめぐって、従来の都市化研究に対する批判的研究[26]として、独自に枠を伝統的村落型社会（農村のむら）に限定し、変化過程を生業構造と社会関係の構造といった二次元を設けている点は、伊藤が発表した論文において一貫するところである。しかし、伊藤は周辺地域を含む他の地域と比較した研究は行っていない。先に述べた忍草や大里などの事例研究は、いずれも一部の地域を取り上げ、地域社会レベルでの社会構造の変動が神社と住民に与えた影響を論じたものであるが、対象地域選定と他地域との関係を既出の調査研究に依拠して論じる形式（追跡調査）をとっており、本格的な分析を試みてはいない。[27]

一方で、戸川安章の「神社綜合調査事例報告―『近代化と神道』の課題にそって」（昭和四十二年）は、近代化、工業化による急速な農山漁村の解体が進む地域として、山形県鶴岡市の地域と椙尾神社を取り上げ、地域神社の機能と変化について、主に外部（外形的）条件――調査地の歴史と概況、神社一般、神職、祭、氏子生活、一般信仰・行事など――の変化に注目して、神職・住民への聞き取り調査を実施し、その結果を詳細にわたってまとめている。ただ、各設問の回答を列挙することに

留まっており、調査報告書の序文で示されているような、「外部条件のどのような部分が変化し、そのような部分が変化せずに持続しているのか、何が消滅し変化していったか、また新しい環境や意識に応じて何があらたに起こり、附加わってきたか」[28]に対する分析は行われていない。しかし、この調査が実施されて以来、伝統的村落型社会における神社神道の変化をテーマにした調査研究は、少なくともこの時期においては管見の及ぶ限り存在しない。先述のように、戸川の調査時期はちょうど過疎が社会に登場した時期とも重なっており、調査地域が属する山形県鶴岡市は、現在過疎地域（過疎とみなされる地域）である。何よりも、理論や思想に着眼した研究ではなく、実際の調査から得られた結果に基づいて、調査当時（昭和四十一年）の地域と神社の外部条件の変化に特化して詳細にわたって示している点[29]は、過疎地域の神社神道の変容（内部と外部の変化）のうち、外形的な変化を知る上で有効な資料であると考える。

以上、伊藤と戸川の研究は本論との関係からいえば、（社会構造の変動のうち）過疎化と神社神道の関係について、昭和三十年代から四十年代半ばまでの間における地域社会の祭祀体系のどのようなところに外形的変化が見られるのかを知ることはもちろん、その変化が生業構造と社会関係の構造の変化と相関関係にあることも知ることのできる貴重な研究資料であると考える。

小まとめ

この時期の先行研究の小まとめとして、社会構造の変化はあるものの、人口の流動による要因が神社神道の衰微に直接関係していないことが確認できた。むろん、そのようなことを述べるほど、この時期の事例研究の蓄積は少なく、日本の地域社会における普遍的な実態を知るための材料が乏しいことは否めない。だが、伊藤や戸川による実態に即した調査研究によって、伝統的村落型社会の「むら」単位で都市化の変化過程を見る限りでは、生産構造と社会関係の構造に大きな変化は見られず、伝統的な祭祀体系も部分的な形態変化はあるものの、維持・継承にそれほど大きな支障をきたすほどではないことが窺い知れる。

「過疎」が現象としては以前から見られていたが[30]、用語として正式に市民権を得たのが昭和四十一年のことであり、その時すでに「昭和三十年代から一貫して社会変動と神道の問題に関心を抱いてき」た[31]平井直房は、過疎化・都市化現象が神社神道（神道教化）に与える影響について多数の論考を発表している[32]。だが、先述の昭和四十年代に過疎関係の研究が盛んに行われる中、過疎関係の研究資料を網羅している『レファレンス文献要目』において、宗教、とくに神社神道との関係を扱う研究は見当たらない。また、この時期に社会現象の変化と神社神道に及ぼす変化を言及したものは、ごく一部を除いて（実態）調査を

踏まえた分析から論じられたものではない。その点は、石井も指摘しているように、この時期における近代化と神道に関する調査研究は盛んに議論されたものの、そのほとんどが先行する西洋の近代化理論に大きく依拠しており、実際の調査を伴わない実証性の欠落する結果、つまり客観的な議論ができにくい状況であったということであろう。[33] とはいえ、この時期の研究が様々な現象を「社会変動」として捉えている点では、その後展開されていく実証的研究の萌芽に貢献したのも事実であろう。

三、第Ⅱ期―昭和五十年代から現在に至るまで―

前節の昭和二十年代から四十年代に続き、ここではそれ以降、つまり昭和五十年代から現在に至るまでの間に発表された先行研究を概観する。当該期の都市化や過疎化など、社会変動と神道の関係を言及する成果は以下のようにまとめることができた。なお、次に列挙する論文に、都市祭礼研究については代表的なものに限定している。その理由は、第Ⅱ期においても社会変動と祭りの関係を扱う論文は継続して発表されているし、そのことはすでに石井も指摘しているからである。つまり、「社会変動と神道の研究が、地域社会の変化と祭祀集団との関係を踏まえた祭り研究に中心が移っていった」[34]とし、都市祭り研究として薗田稔、中村孚美、米山俊直、松平誠らによる一連の成果を挙げているのである。このことから、次に列挙する論文には彼らの研究を補完するものも含まれる。

①岡田重精・櫻井治男・森安仁「過疎村の祭祀と宗教事情」『皇學館大学神道研究所所報』第十五号、昭和五十五年
②石井研士「都市化と宗教―世俗化論再考」『東洋学術研究』第二十五巻第一号、昭和六十一年
③真弓常忠「現代社会と神社の機能―市民宗教の理論と神社祭祀への考察―」『神道と現代』（下巻）、昭和六十二年
④安蘇谷正彦「現代社会と神社の役割に関する覚書」『神道と現代』（下巻）、昭和六十二年
⑤櫻井治男「地域社会と神社―神社の復祀を中心に―」『神道と現代』（下巻）、昭和六十二年
⑥片山文彦「都市化現象と神社の役割」『神道と現代』（下巻）、昭和六十二年
⑦竹本佳徳「神社神道とその教化」『神道と現代』（下巻）、昭和六十二年
⑧薗田　稔「祭りと現代文化」『神道と現代』（下巻）、昭和六十二年
⑨宇野正人「祭りと現代生活―情報化時代への対応―」『神道と現代』（下巻）、昭和六十二年
⑩石井研士「都市化と宗教―地域の宗教文化は均質化した

か」『人類科学』四〇号、昭和六十三年

⑪石井研士「都市化と神社―銀座八官神社の事例から」『神道宗教』第一三〇号、昭和六十三年

⑫石井研士「戦後の東京都の神社にみる境内建物の高層化について（上）」『神道学』第一五五号、平成四年

⑬石井研士「戦後の東京都の神社にみる境内建物の高層化について（下）」『神道学』第一五七号、平成五年

⑭石井研士「戦後の東京都の神社の変容の解明に向けて―東京都神社（本務社）へのアンケート調査から」『國學院雑誌』第九四巻第九号、平成五年

⑮石井研士「神棚祭祀の現状について」『神道文化』第八号、平成八年

⑯石井研士「人口の流動化と神社神道―居住年数からの分析」『神社に関する意識調査』報告書、平成九年

⑰金子　毅「都市化、混住化地域における祭りについての一考察―埼玉県吉川市大字三輪野江八坂祭りにおける祭祀集団の検討」『國學院雑誌』第九九巻第七号、平成十年

⑱中條暁仁「過疎山村における講集団の変化と村落社会―島根県仁多町阿井地区の事例」『地理科学』第五六巻第四号、平成十三年

⑲山口信枝「近代における宮座の変容と持続―福岡県賀茂神社の神加（宮座）を事例として」『宗教研究』第三三二号、平成十四年

⑳山口信枝「近現代における宮座の変容と持続について―北部九州の宮座を事例として―」『経済史研究』第一〇号、平成十八年

㉑尤　銘煌・杉山　誠「山形県酒田市飛島における通過儀礼の変遷―離島の過疎化・少子高齢化について」『山形大学紀要 人文科学』第一六巻第二号、平成十九年

㉒小林瑞穂「神社界における後継者不足に関する意識～山口県の調査を事例に～」『神道宗教』第二〇八・二〇九号、平成二十年

㉓高橋裕介「村落社会の変容と神楽伝承―出雲地方の神楽社中を事例に―」『島根地理学会誌』第四二号、平成二十年

㉔星野　紘「山の芸能が危ない」『民俗芸能研究』第四四号、平成二十年

㉕尤　銘煌「三重県鳥羽市神島における通過儀礼の変遷―離島の少子高齢・過疎化について」『山形大学紀要 人文科学』第一六巻第四号、平成二十一年

㉖尤　銘煌・苗　択遠「少子高齢・過疎化における通過儀礼の変遷―「日本で最も美しい村」山形県最上郡大蔵村を事例として」『山形大学紀要 人文科学』第一七巻第三号、平成二十四年

㉗石井研士「神社神道と限界集落化」『神道宗教』第二三七号、平成二十七年

先に当該期の先行研究を時系列に沿って示したことからも分かるように、膨大な数にのぼる神道関係論文（当該期の「年間神道関係論文目録」に掲載されている論文は三七一四本であった）から、社会変動との関係を直接扱っているものはわずか二七本と少ない（むろん、ほかにも当該期には多数の祭り研究があるが、類似する内容を扱うものが多いため、ここではある程度限定する必要があると判断し、代表的な例を示すに留めている）。とくに、宗教学や神道学者による研究はさらに少ないことが分かる。岡田重精ほか、石井研士の研究がそれに該当する。当該期においても過疎を直接扱う論文はごくわずかであることから、既成事実として扱うものが大半を占める。以降は、それらの研究について概観していく。なお、論を進めるうえで、『神道と現代』に統一テーマを扱う論文として所収され、相互の関係が高い研究（③～⑨）から現代社会と神社神道との関係についてどのような議論が行われたのかを概観した後、個別の研究をみていくことにしたい。

現代社会と神社神道

先に列挙した先行研究のなかに、『神道と現代』（神道文化会、昭和六十二年）に所収されている一連の論文群（③～⑨）がある。それらの研究は、『現代と神道』に所収されている四一の論文のうち、過疎化、近代化、都市化といった、いわゆる社会変動と神社神道との関係を論じたものである。それらの論文では、社会変動の影響が神社神道にも及んでいる現状を踏まえ、戦後まもない時期からの議論[35]を取り上げながら問題指摘をしつつ、その問題が現在も共通課題となっていることに対して、現代社会における神社神道の現代的意味と役割について議論されている。各論文の要点を簡潔にまとめると、真弓常忠は、都市化の進行によって家の崩壊、氏子離れといった現象が起こっている現代においても、神社神道はR・N・ベラーの言う市民宗教に匹敵する要素を持つとし、現代社会において神社は祭祀執行の場としての伝統的性格を維持し、そこでの祭祀が社会的統合の装置として役割を果たしているからこそ、神社の社会的機能があり得ると主張した[36]。安蘇谷正彦は、「現代社会における神道の役割を考えるためには、現代日本の特色をどのように捉えるかが問題[37]」であり、その「特色をとらえるためには、日本の歴史的背景を考え[38]」ることであると述べ、現代の特徴を「富国」と捉えた。その上で、各時代における神道の役割については、神社や祭りの機能と神道思想の意義を述べている。とくに、現代（社会）における神社・祭りの役割[39]が近世・近代からほぼ変わっていないことを述べるも、時代の要求に応じて強調される点は異なることを指摘している。安蘇谷の主張は歴史的背景か

らのアプローチであり、その点は、同じ神社神道の役割を論じるために市民宗教（の形成過程）と儀礼を通じての社会的統合といった、（実際の）機能面に注目する真弓とは異なる点であるが、両者が主張する神社（神道）の本質的な役割や機能についての考え方は共通している。櫻井治男の研究は、地域社会所在の氏神鎮守を理解することを目的としている。そのために、中央行政側の資料を用いて神社の国家管理下における地域住民の神社復祀運動の全国的状況を把握し、さらには行政側と地域住民の意識との隔たりなどについても言及している。片山文彦の研究は、都市化現象に伴う都市の神社の変容を捉え、神社の役割を「神社を取り巻く人々の関わり」[40]の文脈から考察したものである。竹本佳徳の研究は、現代における神道と神社が置かれている状況が相反することを示唆[41]した上で、それでもなお信奉されている神社神道について、神社神道という用語の定義を中心に、教化、現代的意義（役割）を通して再考しようとするものである。また、それらの点について研究者としてではなく、あえて神社神道の一担い手である神職の立場から論じるところが興味深い。薗田稔の研究は、質的変化が起きている現代社会の伝統文化（祭）について、マツリとイベントといった異なる性質をもつ住吉祭り（東京・佃島）と神戸まつりの事例分析を通して、祭の現代的状況を明らかにしようとしたものである[42]。宇野正人の研究は、長年にわたる祭の研究において、祭と現代生活との関わりを論じるものが少ないことを指摘し、全国的規模で展開している都市祭が直接関連をもっているとする行政が祭をどのように把握しているのか、つまり祭をとりまく環境が一体どのような状況になっているかを、行政機関が刊行した資料を中心に具体的に提示しようとしたものである。

こうして概観すると、神道または神社神道の機能や役割、定義を理論的な立場からの議論をはじめ、祭りと文化・生活といった多様なアプローチ（歴史的文脈、行政との関わりなど）から、現代社会における神道の様相を捉えていることが分かる。ただ、これらの研究は、薗田と宇野の研究を除いて、実証的な調査研究に基づく議論ではないが、互いに関係性の高いことが見て取れる。

＊　＊　＊

続いて、先に示した先行研究を順次概観していくとしよう。

岡田重精・櫻井治男・森安仁の研究（①）は、（皇學館大学の）神道研究所第四研究部門の岡田所員を中心に、神道および日本人の宗教生活を理解する上で過疎村問題を重要な課題として捉え、過疎問題が村の集団信仰や信仰生活にどのような変化が生じているのかを明らかにしようとしたものである[43]。金子毅の研究（⑰）は、都市化に伴う村落社会の解体と祭祀集団の変化、とくに祭り参加に対する祭祀集団の意識の変化を明らかにしよ

うとするものである。中條暁仁の研究（⑱）は、「過疎山村における村落社会構造の変化を通して講集団の性格や機能の変化を考察し」[44]たものである。山口信枝の研究（⑲・⑳）は「宮座が明治以降戦中戦後期における社会状況の変化の中で、どのように対処し変容してきたかというその変容過程を検討し、現代における宮座の存在意義について考察」[45]したものである。尤銘煌らによる研究（㉑・㉕・㉖）は、いずれも少子高齢・過疎化が通過儀礼にもたらした変化を社会学的視点から明らかにしようとしたものである。小林瑞穂の研究（㉒）は、現代の神社界が抱える問題の一つである後継者問題について、宮司・配偶者・後継者の意識の違いを、山口県神社庁が実施した「神社の【後継者】に関するアンケート」の結果分析から明らかにしようとしたものである。[46]高橋裕介の研究（㉓）は、村落社会の変容を神楽伝承のあり方から探り、村落社会における神楽の役割について明らかにしようとしたものである。星野紘の研究（㉔）は、過疎化（限界集落化）に伴い、存続の危機に直面しつつある伝統芸能について、具体的な実態調査を通して現状を明らかにしたものである。[47]

それらの研究論文について限定的な分類を試みるならば、まず過疎化を含む社会変動と神社神道を、主に祭りとの関係から明らかにしようとした（祭礼研究）一面的・個別的な研究がある。金子毅、中條暁仁、山口信枝の研究がそれに当たる。これらは、伝統的村落型社会における民俗学的な調査研究である。その一方で、神社境内（建物）の変化、神棚の変化、人口の流動化、精神文化（神道文化）の変化、宗教意識の変化などといった、多方面にわたって社会変動と神社神道との関係を明らかにしようとした研究がある。[48]ただ、この分類に該当する研究のほとんどは、石井による都市化と宗教に関する一連の論文に集中している。石井は、都市型社会（主に東京都と近郊）もしくは全国規模の調査で得た多様な統計データを用いながらの実証的研究[49]を試みているのが特徴であるが、都市化や世俗化と神道に関する理論的研究[50]も多数発表している。[51]石井の研究は戦後の都市化にともなう宗教の変容が主な関心分野である（②、⑩～⑯）。都市化と宗教との関係について、石井によると、大都市だけでなく、伝統的な村落型社会においても、宗教は都市化に伴って変容し、均質化したという。[52]「村落では脱宗教化が進む一方で、都市では逆に宗教化が進行してい」[53]るが、都市の宗教化には宗教がもつ意味を大きく変容させていることを指摘している。現代の日本人の宗教生活については調査研究がない限り断言はできないが、これまで見てきた先行研究をはじめ、石井の一連の調査研究、そして現在筆者が取り組んでいる過疎地神社の調査研究の結果をみると、現在も村落宗教は石井の予想から大きく外れてはいない。氏子組織の崩壊もしくは氏子意識が希薄化していることが常識化している状況の中で、これまでの

調査研究の報告では過疎・過疎地の神社神道は存続していることが、そのような石井の予想の裏付けとなっているのである。さらに、石井は過疎や限界集落についての論文も発表している(27)。現在、この論文が過疎地域と神社をとりまく変化を俯瞰することのできる唯一の研究であると言っても過言ではない。論文では平成二十六年に日本創世会議（座長・増田寛也）が公表した「消滅可能性都市八九六」を対象に、独自の調査を用いて消滅可能宗教法人を算出した結果が中心となっている。つまり、過疎化がこれまでと変わらぬ状況が続く限り、日本創世会議が予想した二〇四〇年までに、神社は約四割減少するというのである。そのような石井の驚くべき将来の予測は、たちまち神社界を含む宗教界や、関連学界、メディアには少なからぬ影響を与えることとなった。ただ、先述の予想と異なる点として、（すでに石井自身も述べているが）この消滅可能自治体および神社の予測はあくまでもデータの観測によるものであり、このまま何もしなければということを前提としている。それでも、この石井の予測は何らかの形で神社神道が置かれている状況に対する危機感を共有するに十二分の効果をもたらした。その効果は研究者だけでなく、神社界にも及んでいる。この論文が公開された翌年の平成二十八年九月に、神社本庁では「過疎地域神社活性化推進委員会」（以下、委員会）(54)の設置が承認され、十月より月に一回開催されることとなった(55)。この論文が委員会の設立にいかなる影響を与えたかは別として、実際の委員会において神社の活性化に関する研究を専門とする研究者を交えて積極的な議論が行われており、このことは今後も注目しておく必要はあろう。

ちなみに、前節で述べた第Ⅰ期の時点では、農村部の祭祀集団だけでなく、都市部における氏子組織も十分に保たれていることが薗田(56)による調査研究で言及されている。そのようなことは、第Ⅱ期の先行研究からも、伝統祭祀や氏子組織の衰退または崩壊が神社神道において重要問題として取り上げられているが、報告内容をみると、そのような厳しい現状でも何とか維持・継承されている事例も少なくない。

こうして先行研究を概観してみると、祭礼の変容を中心にした一面的な研究は、そのほとんどが個別（事例）研究であることから、地域社会と祭りとの関係は明らかにできても、神社との関わりを包括的に知ることは困難である一方で、多面的な研究においても実際に地域レベルにおける実態についての言及は少ない、といった課題を共有しているといえよう。

一方で、昭和六十一年三月二十八日、神社本庁で「現代社会と神社」をテーマにして開催された教学研究大会のほかにも、皇學館大学で「「神道」を伝える―今、なぜ、何を?―神道と現代社会―」をテーマに開催されたシンポジウムもある(57)。しかし、その後、諸学会における学術大会で特集やシンポジウム、

パネルセッションなどで社会変動と宗教、とくに神社神道との関係がテーマとして取り上げられていない状況が続く。このことは、これまでの議論がその後の研究に継承されることなく、過疎問題の重大さのみを共有しながら、その要因を明らかにしようとすることなく、（関連性の薄い）個別研究に移行していったことを裏付けている。先述の『神道と現代』で議論を行った各研究も、時期的には第Ⅱ期に属するが、むしろ内容的には第Ⅰ期から第Ⅱ期への過渡期として位置付けられよう。また、過疎問題と神社神道との関係を追っていく中で、第Ⅱ期の現代に近づいてくると、「限界集落化」が登場することになる。このことは直接過疎地域での個別研究がそれほど進んでいない段階で、新たな概念の出現によって、研究の動向もさらに枝分かれしていくことになる。

小まとめ

第Ⅱ期の小まとめとして、当該期における研究は、過疎化と都市化などを広域の社会変動として捉え、社会の変化が神社神道、とくに神社の祭祀文化に及ぼした影響を、宗教学、神道学、民俗学[58]、社会学、人類学、地理学[59]などから明らかにしようとしたことは共通している。しかし、個別的かつ相互に関連付けられない研究であることが指摘できよう。興味深い点として当該期において、調査研究や諸学会の学術大会の発表テーマを概観すると、とくに諸学会の規模が次第に大きくなるにつれ（学術大会における発表数も増えたことが要因の一つであると思うが）、社会変動と神社神道との関係を扱う発表は断続的に見られる[60]。しかし一方では、それらのテーマが発表後に論文化されたものは少ない[61]。無論、先行研究を追う際に、関連研究の有無は数本の発表を経てから論文化する、または投稿後に学術大会で報告するなど、研究者によって公開方法が異なる点に留意が必要なのは当然想定されることである。それにしても、研究の蓄積が昭和二十年代（第Ⅰ期）から現在（第Ⅱ期）に至るまでの約七〇年間に、神社神道の根幹を揺るがす事態に直面しているといった危機感は高まる一方であるにもかかわらず、宗教学や神道学においては他の学問領域と比べると、事態の危機感は共通していながら、それにかかわる（実証的）研究はほとんど進んでおらず、そのことについていまだ説得力のある理由を述べるものもない。これは、本論と直接的関係はないが、石井が近代化と神道の問題について「変化する時代への高い関心と対応への努力の存在にも拘わらず、正確な意味での実情の把握と理論的分析は合致しないまま、時代への適応が模索される傾向が存在し[62]」たとする指摘と通底する点であると考える。

おわりに

全体のまとめとして、社会変動が神社神道に及ぼす影響については、その関心が高まっていく第Ⅰ期の昭和二十年代の神道の民俗学的研究を中心とする先駆的研究からはじまり、昭和三十年代後半になると、「現代社会における教団組織の在り方を研究[63]」した井門富二夫、「現代社会と神社神道との関係の考察において重要な役割を果た[64]」し、都市化と過疎化にも注目した平井直房、そして「制度と人の両面において、戦後の神社神道の実証的研究、あるいは宗教社会学的研究への道を開い[65]」た岸本英夫と、その岸本とともに「神道の近代化」の調査研究にかかわった研究者らの成果にみられるように、戦後の社会変動と神道に関する実証的もしくは理論的研究が展開されていった。そして、第Ⅰ期（主に二十年代と三十年代後半）の研究における共通課題が、個別的かつ相互に関連付けられない研究であること、実証性が欠落していることなどは、すでに石井によって指摘されており、筆者もその点については共感を覚える。つまり、実態調査が抱える問題について「実証性の欠落」として捉え「神社神道が持続もしくは変化しているのかどうか、あるいは、どのような点が維持され、どのような点が変化しているのかを判断する具体的なデータがほとんど示されないままに、これらの重大な問題が論じられてきたといっていい。[66]」とする石井の指摘に対し、筆者も昭和四十年代以降、社会変動はもちろん、過疎地域の神社を対象に広域的観点から行われた研究はごく一部を除いては見当たらない、空白状態が続いたことを指摘したのである。

ところが、人口減少社会に突入することが現実化してきた今ではこれまでに危惧されてきた種々の社会問題が可視化してきた。それと同時に、「過疎」は「人口減少社会」と並んで、社会現象として最もクローズアップされる話題となっている。そして、その影響は学問領域においても再び「社会変動と宗教」の形として出現し、神道との関係もその枠組みからくみ取ることができるようになったのである。

本論の最後に、第Ⅰ期と第Ⅱ期を合わせて検討することで、新たに得られた成果について、ここに述べるとしよう。

第Ⅰ期における研究の多くは一部を除いてほとんど継承されることはなかった。第Ⅰ期の研究は理論的または観念的で、実証性に欠けることが指摘できる。第Ⅱ期はそれとは対照的に客観的・実証的な研究がみられるようになっていく。しかし。その第Ⅱ期にも課題がないわけではない。つまり、第Ⅰ期と第Ⅱ期における研究が双方に共通問題を有しつつ、第Ⅰ期で行われた研究を補完、追補するものであるという点で、（結果が幸か不幸かは別にして）再検討の必要があろう。

先行研究の乏しい領域の研究に共通する理由の一つに、先述

の先行研究の断続性にあるとするならば、本論においては、関連研究を異なる角度から検討することで、歴史的な問題意識の中に連続性が見いだせたことも、重要な成果であると考える。

注

（1）「過疎」を報じるマス・メディアの動向については、拙稿「宗教専門紙が報じる過疎問題―仏教系・神道系専門紙を手がかりに―」『宗教と社会貢献』二巻二号、六九～八五頁（平成二十四年）、同「過疎と宗教―三〇年をふりかえる」『人口減少社会と寺院―ソーシャル・キャピタルの視座から』四一～六六頁（平成二十八年）を参照されたい。

（2）筆者による地域住民と神社との関わり方についての実態調査によれば、集落ごとに異なる地域性が神社祭祀などの関わりにも異なる様相を呈していることが確認できる。参考として代表的な事例研究を次に挙げておく。拙稿「過疎地域の神社―高知県高岡支部旧窪川町・旧大野見村を事例に―」、『國學院大學神道研究集録』第二四輯、二九～五四頁（平成二十四年）、「過疎集落における氏神信仰の実態―高知県高岡郡の旧川口地区の氏子の語りから―」、『モラロジー研究』七三号、一二一～一四〇頁（平成二十六年）、「過疎地域の神社調査―高知県高岡郡旧窪川町を事例に―」『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第九号、五九～八二頁（平成二十七年）、「過疎集落における氏神信仰の継承―高知県高岡郡の旧桧生原集落を事例に―」、『モラロジー研究』七五号、五一～七〇頁（平成二十七年）など。

（3）国立国会図書館調査および立法考査局編『レファレンス文献要目』第十五集「過疎問題に関する文献目録」、昭和四十九年。なお、このレファレンス文献要目は、昭和三十五年から五十九年の間に行われた研究業績を、それぞれ一定の期間中に集めた文献を分野別にまとめた形として、全一七集が刊行されている。本文で取り上げた十五集を除いた詳細は次の通り。また中には論文集になっているものでタイトルが付されていないものも含まれる。第一集「」（昭和三十五年）、第二集（昭和三十六年）、第三集（昭和三十八年）、第四―六集、第七集「労働関係欧文逐次刊行物目録」（昭和四十年）、第八―九集（昭和四十年）、第十集「外国法律雑誌総合目録」（昭和四十二年）、第十一集「資本取引自由化問題」（昭和四十三年）、第十二集「都市化と農業に関する文献目録」（昭和四十四年）、第十三集「防衛関係文献目録」（昭和四十四年）、第十四集「南北問題に関する文献目録」（昭和四十八年）、第十六―十七集「海外食糧・農業関係和文雑誌記事目録」（昭和六十年）。

（4）平成二八年一二月現在、ＮＩＩ論文情報ナビゲータ［CiNii］における「過疎」関連の学術論文は三八五五件、国立国会図書館蔵書サーチ［NDL Search］においては雑誌・博士論文・記事に絞って検索した結果では三三〇七件がヒットした。各研究内容の詳細までは確認できなかったが、過疎に関連する言及が顕在化するのは昭和四十年以降であると言えるだろう。

（5）『日本文化研究所紀要』については、國學院大學のホームページに併設されている日本文化研究所のウェブサイトに第一輯から一〇〇輯までの総目次が掲載されている。

（6）『宗教研究』については、日本宗教学会のウェブに開設された『宗教研究』データベース論文検索（平成二十八年一月現在三四〇号までのデータを収録しており、データ総数は一五〇七八件）を利

用して、「神道」（一五二件）、「過疎」（二件）、「社会変動」（一〇件）、「変化」または「変容」（一四八）などのさまざまなキーワードでの検索を試みた結果（括弧中は該当論文数）では、本論に関する論文はごく一部に過ぎなかったことを確認した。また、ウェブサイトでは大正五年に発行された創刊号から昭和三十年（一四五号）までの誌面データをＰＤＦファイルとして公開されている。

（7）　石井研士『戦後の社会変動と神社神道』大明堂、平成十年。石井は、戦後の社会変動の中で神社神道がどのような変化を受けたかを、各種の統計データのほかに、独自の調査データを用いながらの実証的研究を試みている。

（8）　この両論考は、石井研士「戦後における神道の宗教学的研究―研究史序論」『脇本平也・田丸徳善編『アジアの宗教と精神文化』（新曜社、平成九年）と、同「神道と社会変動をめぐる研究史」『神道宗教』第一六八・一六九号（平成九年）をもとに加筆補正を行っている。

（9）　本論では神社神道に焦点を当てていることから、石井の論考を採用しているが、ほかにも、芹川博通著『都市化時代の宗教』の序論「現代宗教論の課題」でも、社会変動と宗教との関係について、世俗化と都市化との関わりから詳細にわたって論じている。とくに都市化と宗教との関わりについては、森岡清美、堀一郎、柳川啓一、井門富二夫らによる研究の論点を紹介しながら説明している。

（10）　石井、前掲、五〇頁。

（11）　掲載論文の検索には主に文末に掲載されている「年間神道関係論文目録」を参考にした。

（12）　ほかにも、神道関係の研究が所収されている学術雑誌および機関誌としては、『神道史研究』（昭和二十八年～）、『皇學館大学神道研究所紀要』（昭和六十年～平成二十六年）、『皇學館大学研究開発推進センター紀要』（平成二十七年～）『明治聖徳記念学会紀要』などが挙げられる。そのうち、『明治聖徳記念学会紀要』については、ウェブ検索サイトが開設されており、論題一覧を公開している。平成二十六年一月現在『神道研究紀要』第一〇輯、『明治聖徳記念学会紀要』復刊第四八号までのデータの一部が収録されている。http://www.mkc.gr.jp/seitoku/search.htm、最終閲覧日平成二十八年一月九日。

（13）　石井、前掲、九～一〇頁。石井は、昭和二十年代の神道研究についても、戦後行われた宗教の実態調査を俯瞰する論文として柳川啓一の「宗教調査の現状」を取り上げるほか、柳川が収集・分類による「神社神道」関係の実証的な調査研究一覧も合わせて掲載しているが、その大半が従来の村落における神道の民俗学的研究であり、神道研究の実証的な調査研究が行われるようになるのは昭和三十年代後半以降になってからであると指摘している（一二～一三頁）。また、石井によれば、戦後の神道研究における「社会変動と神道」のテーマがとくにクローズアップされたのは、三度あったとする（二一頁）。つまり、昭和三七年から翌年にかけての神道宗教学会でのシンポジウムと共同討議、昭和四十年の第一回神道研究国際会議、昭和四十二年の第二回神道研究国際会議を指している。国際会議では、近代化の概念規定が問題となるほかに、神社神道の基盤の変化についての議論がなされたことを述べている。

（14）　同、一一頁。

（15）　石井が取り上げた調査研究とは、岸本英夫「神道の都市化」『日本文化研究所紀要』第一五輯（昭和三十九年）、伊藤幹治「都市化とむらの生活構造序説―忍草の事例分析」同第一六輯（昭和四十

年）、同「黒島の社会と宗教の構造と変化―大里事例の予備的分析」同一七輯（昭和四十年）、花島政三郎「水没による部落の解体・再編成と宮座―滋賀県神崎郡永源寺町愛知川ダム建設の場合」同第二〇輯（昭和四十二年）、戸川安章「神社綜合調査事例報告―『近代化と神道』の課題にそって」同第二十一輯（昭和四十三年）、『都内神社索引・附区別神社分布図』（昭和四十三年）、森岡清美・花島政三郎「近郊化による神社信仰の変貌」同第二二輯（昭和四十三年）、薗田稔「祭りと都市社会―『天下祭り』〈神田祭・山王祭〉調査報告（1）」同第二三輯（昭和四十四年）、伊藤幹治「『氏子』の社会人類学序説（上）」同第二五輯（昭和四十四年）、同「祭団の構造と論理―沖縄民俗社会論（一）」同第三三輯（昭和五十年）、薗田稔「The Traditional Festival in Urban Society」（祭の盛衰と構造変化）同第三五輯（昭和五十年）、『神社アンケート統計図表』（近代化と神道資料）（昭和五十年）、『東京都区内神社・氏子区域地図並に町丁一覧』（昭和五十年）、の一三本を指す。

(16) 本文に挙げた研究の要約は、前掲石井『戦後の社会変動と神社神道』、一二一～二四頁から引用。そのほかに、当該期において部分的ではあるが、社会変動と神社神道の関わりを論じてる調査研究として、芹川博通「都市化と宗教行事―都下府中市における実態」『学報』九号、淑徳短期大学、昭和四十五年、同「社会変動と宗教―一漁村の都市化の場合」『研究紀要』一二号、淑徳短期大学昭和四十八年、などを挙げておく。なお、それらの論考はいずれも芹川博通著『都市化時代の宗教』（東洋文化出版、昭和五十九年）に所収されている。

(17) 石井、前掲、二四頁。石井は、これまでの研究は主に一部の事例を取り上げ、問題点を指摘し、社会構造の変化が神社や地域住民に与えた影響を示唆したものであり、具体的な検証まではなされていないとも指摘している。

(18) 同、四一頁。

(19) 同、四三頁。

(20) 同、四四頁。

(21) 伊藤幹治「都市化とむらの生活構造序説―忍草の事例分析」『日本文化研究所紀要』第十六輯、昭和四十年、二一六頁～二一八頁。伊藤は調査対象地域の忍草部落における神社の祭や行事の形態は、それ自体としての存在意味を持たず、常に他の諸慣行との機能的な関連において存在していることから、そういった伝統構造が解体されない限り、今後も維持され続けると述べている。

(22) 伊藤幹治「黒島の社会と宗教の構造と変化―大里事例の予備的分析―」『日本文化研究所紀要』一七輯、昭和四十年、一〇五～一〇六頁。

(23) 伝統的村落型社会（「むら」）において、昭和二十年以降、農家の兼業化が進行し、都市的産業を営む世帯数も急激に増加するなど、産業的次元の変化が著しいなかでも、家族形態については、昭和二十年以降から調査時点にいたるまでほとんど変化がなく、伝統的な祭祀集団も部分的に維持されていることは、伊藤の一連の研究で何度も強調されている点である。

(24) それらの主な業績は著書『宗教と社会構造』（弘文堂、昭和六十三年）としてまとめている。本論で取り上げた忍草・大里の事例研究も部分的な加筆・修正を行い、著書の第三部に所収されている。

(25) 伊藤幹治「都市化と地域社会の宗教生活」『人類科学：九学会連合年報』二三号、昭和四十五年、一五頁。

(26) 伊藤は従来の「むら」の都市化研究の実証的事例分析において、エコロジカルな次元（労働形態や土地利用を中心とした生業構造）の過程と社会の次元における変化過程の二つの変化過程の複合的検討がなされていないことを指摘しており、そのような問題指摘から、伊藤の研究では「むら」の都市化について、農業構造の変化を軸としたエコロジカルな次元の変化過程と、社会次元の伝統的な生活様式の変化過程という、二つの次元における変化過程を包括した概念として捉えていることが強調されている。詳細については、伊藤幹治「都市化とむらの生活構造序説」、一八一～一八二頁を参照。

(27) 伊藤は、各論文の主題や副題に附いている「序論」、「予備的分析」などにも表れているとおり、いずれも短期間での調査で採録した資料に基づいていることを言及し、問題提起の立場を示しているが、それ以降の具体的な理論分析の研究は行われていない。

(28) 戸川安章「「近代化と神道」委託調査報告「椙尾神社」調査報告」、『國學院大學日本文化研究所紀要』第二十一輯、一一六頁。

(29) たとえば、「神社一般」に関する設問項目には、神社の鎮座地、お旅所、境内の建築物（変化の有無も）、御祭神、由緒、境内社・末社の有無、初宮参りの様子、戦後を境にした氏子や崇敬者の意識（態度）変化の有無とその内容、新氏子・旧氏子の関係と役割、授与品（お札、お守りなど）内容とその変化の有無、社殿（建て替え、修繕）について、などが含まれている。これらの設問だけでも一地域における神社に関する大まかな情報は得られる。

(30) 東京や大都市圏における人口流動、周辺地域への人口の拡散、他地域から東京周辺地域（近郊）への転入など、大都市地域化の進行などの現象はすでに昭和三〇年代半ばから確認できる。なお、東京における人口流動についての詳細は、天井勝海「人口流動から見た東京の大都市圏」『新地理』一四巻一号、昭和四十一年、同「東京大都市圏における人口変動と人口流動」同一五巻三号、昭和四十二年を参照。

(31) 石井、前掲『戦後の社会変動と神社神道』、四一頁。

(32) 平井の社会変動と神社神道にいかに関心を寄せているのかを、本論と関連するものだけを挙げておく。「共同討議　近代化と神道」（『神道宗教』第三四号、昭和三十八年）、「共同討議　神社神道の現状と将来」（『神道宗教』第三六号、昭和三十九年）「民族宗教の内部伝道」（『國學院雑誌』六四巻五・六合併号、昭和三十八年）、「人口移動と神社神道」（『神道宗教』第四六号、昭和四十二年）。

(33) 石井、前掲、四三頁。

(34) 同、五〇頁。

(35) たとえば、昭和四十一年六月に國學院大學日本文化研究所の主催で開催された神道研究国際会議での議論が挙げられる。なお、神道研究国際会議での議論の詳細については、石井研士「神道と社会変動をめぐる研究史」『神道宗教』第一六八・一六九号（平成九年）を参照されたい。

(36) 真弓常忠「現代社会と神社の機能―市民宗教の理論と神社祭祀への考察―」『神道と現代』（下巻）、昭和六十二年、八一～八四頁。

(37) 安蘇谷正彦「現代社会と神社の役割に関する覚書」『神道と現代』（下巻）、昭和六十二年、八八頁。

(38) 同、八九頁。

(39) 同、一一〇～一一二頁。安蘇谷は現代社会における神社・祭りの役割は、五穀豊穣、共同体の安寧、共同体の統合化、個人問題の解決、生の充足の五項目に分けられると述べている。

(40) 片山文彦「都市化現象と神社の役割」『神道と現代』（下巻）、昭和六十二年、一五七頁。なお、神社の取り組みに関する具体例として、（故）片山自身が宮司をつとめた花園神社（東京）のカルチャーセンターの事例を挙げている。

(41) 竹本は、神道は現在のような社会状況――先にみた安蘇谷論文（一二三頁）で指摘された、経済発展に伴い富国を実現した現代の日本社会が抱える重大な問題で、富国を支える経済基盤が脆弱であり、色々な問題を抱えていることと、拝金・崇物・利己的という風潮のこと――が続く限り衰退すると危惧される一方で、それとは相対的に、神社は過疎化の影響を受けて護持が困難である事例はあるものの、経済成長に伴い、一般的な神社の運営はむしろ安定してきていることを述べている。

(42) 薗田による二つの異質な文化の事例分析の結論として、「現代社会はいまやほぼ完全に伝統的なムラ型から都市型の社会状況へ移行しており、都市と農村を問わず生活の前面にわたって都市型の装置系が浸透した時代を迎えている」（二〇三頁）と述べている。

(43) ちなみに、当該期において最も早く主題に「過疎」が明記されているが、それ以降「過疎」がテーマに直接使用されている神道研究は、管見に及ぶ限り拙稿を除いてごくわずかしかない。

(44) 中條曉仁「過疎山村における講集団の変化と村落社会―島根県仁多町阿井地区の事例」『地理科学』第五六巻第四号、平成十三年、一七頁。

(45) 山口信枝「近現代における宮座の変容伯父族について―北部九州の宮座を事例として―」『経済史研究』第一〇号、平成十八年、七四頁。なお、山口信枝は地域の都市化と宮座の変容に関する論文を多数発表しており、そのうち九州北部を対象とした成果を著書『宮座の変容と持続』（平成二十二年）としてまとめている。

(46) この論文で取り上げる後継者問題に関する調査は山口県のほかに、愛媛県、新潟県、埼玉県、山形県、滋賀県、長野県などでも行われ、その結果は次に挙げる調査報告書（一部資料）にまとめてられている。長崎県神社庁・検定講習会事務担当「「神職要請検定講習会」の在り方について」（昭和三十年）、愛媛県神道青年会『愛媛県神社神職状況調査報告書』（昭和五十二年）、『各県神社庁神職後継者問題実態調査報告書（新潟・埼玉・山口・山形）合冊』（平成二十二年）など。

(47) この論文を発表した翌年には、他の関連研究をまとめて、著書『村の伝統芸能が危ない』（岩田書院、平成二十一年）が刊行された。

(48) これらの分類には筆者による一連の研究も含まれる。参考として、拙稿「社会構造変動と神社神道「過疎地域」の小豆島土庄町を事例に」『國學院大學神道研究集録』二四輯（平成二十二年）、「過疎地域の神社―高知県高岡支部旧窪川町・旧大野見村を事例に―」『國學院大學神道研究集録』二六輯（平成二十四年）、「過疎地域と神社をめぐる実態調査研究史」『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第七号（平成二十五年）、「過疎地域における神社神道の変容―高知県高岡支部の過疎地帯神社実体調査を事例に―」『総合人間学』第八号（平成二十六年）、「過疎集落における氏神信仰の実態―高知県高岡郡の旧川口地区の氏子の語りから―」『モラロジー研究』第七三号（平成二十六年）、「過疎地域の神社調査―高知県高岡郡旧川窪町を事例に―」『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第九号（平成二十七年）、「過疎集落における氏神信仰の継承―高知県高岡郡の旧桧生原集落を事例に―」『モラロジー研究七五

号（平成二十七年）、「過疎地域の神社神道の現状と課題―高知県の過疎集落神社を事例に―」『國學院雑誌』第一一五号（平成二十七年）などを挙げておく。

(49)　これまでに石井研士は現代社会と神社神道に関する調査論文を多数発表している。そのうち、社会変動と神道に関する実証的研究の成果一部を、本文に挙げているものを除いて挙げておく。石井研士「戦後の氏神神社の氏子数の変化について」『宗教研究』二九一号（平成四年）、同「現代日本における祭礼文化の持続と変容の理解に向けて」『明治聖徳記念学会紀要』復刊第三七号（平成十五年）、同「世論調査から見た神社神道―「神道」を選択するのは誰か―」『神道宗教』第一九一号（平成十五年）、同「現代日本人の神観念の把握と世論調査」『國學院雑誌』第一〇四巻第一一号（平成十五年）、同「神棚祭祀・神宮大麻頒布の現状の理解に向けて」『神社本庁教学研究所紀要』第九号（平成十六年）などがある。

(50)　石井研士の社会変動と神道に関する理論的研究として、石井研士「戦後における神道の宗教学的研究―研究史序論」『脇本平也・田丸徳善編『アジアの宗教と精神文化』新曜社（平成九年）、同「社会変動と神道―研究史序論」『國學院雑誌』第九八巻第九号（平成九年）、鈴木健太郎・石井研士「戦後の神社神道の変容に関する研究」『日本文化研究所紀要』第八五輯（平成十二年）、石井研士「現代日本における祭礼文化の持続と変容の理解に向けて」『明治聖徳記念学会紀要』復刊第三七号（平成十五年）などがある。

(51)　本論で取り上げた石井の社会変動と神道に関する実証的研究の成果は、著書『銀座の神々―都市に溶け込む宗教』（新曜社、平成六年）および『戦後の社会変動と神社神道』（大明堂、平成十年）、『日本人の一年と一生―変わりゆく日本人の心性』（春秋社、平成十七年）、『増補改訂版 データブック現代日本人の宗教』（新曜社、平成十九年）などにまとめられている。また、石井がこれまでに発表した論文は彼のウェブサイト「石井研士の現代宗教研究所」（http://www2.kokugakuin.ac.jp/ishii-rabo/）に一覧とともに、一部はＰＤＦ化された論文データが公開されている。

(52)　石井研士「都市化と宗教―地域の宗教文化は均質化したか」『人類科学』四〇号、昭和六十三年、二〇頁。

(53)　同、二〇～二一頁。

(54)　平成二十八年九月十九日付の『神社新報』によれば、「過疎地域神社活性化推進委員会」は、昭和四十年代から顕著となってきた農山村の過疎化に加え、近年の少子高齢化の進行が地域間格差や後継者の深刻化、神社を支える人的・経済的基盤の喪失による不活動神社の増加などをもたらしているとの認識に基づき、新たに設置されたもので、過疎化および少子高齢化に起因する斯界の現状把握と分析を通じ、過疎地域を中心とする神社の活性化推進のための施策を立案し、その施策について実施状況を検証するとともに、必要に応じて改善に向けた提案を行うことを目的としていることが述べられている。

(55)　委員会開催に関する詳細は『神社新報』に随時掲載されているため、そちらを参照されたい。

(56)　薗田稔「祭りと都市社会―『天下祭』（神田祭・山王祭）調査報告（1）」『國學院大學日本文化研究所紀要』第二三輯、昭和四四年。

(57)　シンポジウムでの薗田稔、平野孝國、佐野和史、石井研士、本澤雅史、牟禮仁らによる議論は『神道研究所紀要』第一六輯（平成十二年）に掲載されている。

(58) 民俗学における神道研究については、新谷尚紀「神社祭祀研究と民俗学」(『日本民俗学』二二七号、平成十三年)にまとめられているので参照されたい。

(59) 地理学における山村研究、とくに過疎問題に関する研究動向は岡橋秀典「現代日本における山村研究の課題と展望」(『人文地理』第四一巻第二号、平成元年)、代表的な調査研究については成城大学民俗学研究所編『昭和期山村の民俗変化』(名著出版、平成二年)を参照されたい。

(60) たとえば、菅直子「少子高齢化による年中行事の変化に関する一考察—秋田県横手市大森町を事例として—」『神道宗教』(第六六回学術大会紀要号)第二二八号(第二部会報告)平成二十四年、秋野淳一「都市祭礼研究の課題に関する予備的考察」『神道宗教学会』(第六十六回学術大会紀要号)第二三二号(第四部会報告)、平成二十五年、同「「元祖女みこし」の現状にみる参加者の実態と神田祭の変化」『神道宗教』(第六十七回学術大会紀要号)第二三六号(第三部会報告)、平成二十六年、石井研士「限界集落化と神社神道」『神道宗教』(第六八回学術大会紀要号)第二四〇号(第三部会報告)、平成二十七年、牟禮仁「神社界将来予測一端—神職数の推移から」『神道宗教』(第六八回学術大会紀要号)第二四〇号(第三部会報告)、平成二十七年、などが挙げられる。ほかにも、「宗教と社会」学会第六回学術大会で「都市祭礼研究の課題と可能性」をテーマにして開催されたワークショップが挙げられる。そこでの報告テーマは次の通り。福間裕爾「都市祭礼の伝播—北部九州の山笠—」、南博文「勢いの場の共同形成—祭礼への心理現象学的接近—」、小松秀雄「都市祭礼の文化的再生産」、芦田徹郎「現代都市祭礼のアイロニー—祭りの不可避性と不可能性をめぐって—」。なお、これらの研究報告は『宗教と社会　別冊一九九八年ワークショップ報告書』(平成十一年)に所収されている。

(61) 当該研究における先行研究または類似研究が「少ない」「皆無」という表現が必ずしも研究の蓄積がないことを意味するものとは限らない。取り組む研究に調査を伴うか否かといった研究手法の有無を問わずともそこには、現代の社会問題としての過疎と神社神道との関係を探求する筆者にとっても同じことが言える。

(62) さらに、石井は、「こうした傾向は神社界をとりまく戦後まもなくの法制度や社会状況の変化、昭和三十年代半ばから始まる高度経済成長にともなう都市化と過疎化への早急な対応を迫られるなかで生じたものと考えられる」と述べ、以後の近代化と神道の問題は、両者を結ぶ実証性が看過されたまま、抽象的な議論と神道教化の問題へと、二極分化する可能性を持って進んでいくことになると指摘している(石井『戦後の社会変動と神社神道』、一八頁)。

(63) 石井、前掲『戦後の社会変動と神社神道』、一三頁。

(64) 同。

(65) 同、二一頁。

(66) 同、四九頁。